

## 2 学級を子どもたちの「居場所」に

### 基本ステップ2：学級集団の理解

第3章の概論で述べたように、「居場所」の2条件は「ルール」と「ふれあい」(リレーション)です。「気になる子」が溶け込む学級づくりでは、「基本ステップ1」で子どもも理解ができれば、次は、現在の学級が、この2つの条件においてどのような状態にあるか、理解する「基本ステップ2」を踏みましょう。



### 居場所づくりを支える理論：欲求階層説

私が18年の間、担任としてかかわった各学校の子どもたちは、はたして学級を「居場所」と感じていたのだろうか。当時は、ただただ必死に子どもに向き合っていた私ですが、あらためて昔を振り返ると、「うーん」と首をかしげてしまう自分がいます。

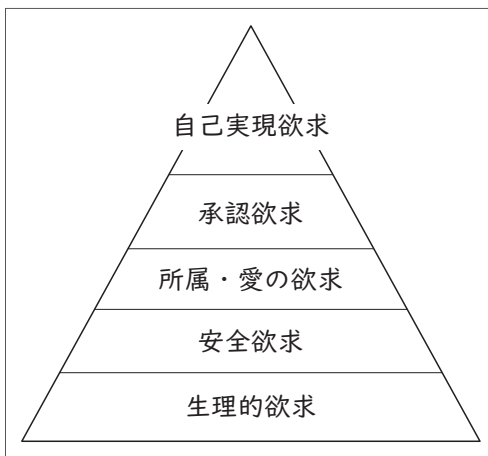
私は、國分康孝先生、河村茂雄先生から学んだ「ルール」と「ふれあい」(リレーション)が居場所の2条件という考え方に納得しています。実際、担任時代を振り返ると、「まさに」と思い当たる節が多々あるからです。昔の私を振り返ったとき、「ルールが甘かったなあ」「私と子どものふれあいの糸は細かったかも」などと反省することしきり…。子どもたちに「ごめんね」と謝らなければいけないことばかりが脳裏に浮かびます。

しかし、いくら数多くの体験から思いを語ったとしても、それだ

けでは「本当にそうなのだろうか？」という疑念がいつまでも消えず、自信を持って子どもたちの前に立つことはできないと思います。体験から語る思いのブレが減り、「やはりこれでいいんだ」と自信を持つには、理論を学ぶことがとても大切です。「I think の前には理論が必要」という國分先生に学んだ言葉が、今はとてもよくわかります。

今、私が「居場所の2条件」を強く語ることができるのは、A・マズローの欲求階層説を学んだからです。マズローは、人は誰でも自己実現の欲求を持つが、その欲求は、階層の下位に配置される欲求が部分的にでも満たされて生ずると唱えました(図1参照)。個々の事例を紐解けば「すべて」とまではいえませんが、一般的に「豊かで平和な国」ととらえられる日本において、最下層(第1層)の「生理的欲求」を満たせない子どもは多くないことでしょう(虐待等を除く)。しかしながら、戦争や飢餓に苦しんでいる国の子どもたち

図1 マズローの欲求階層説



には、「家がない」「水がない」「食べ物がない」など、最下層の欲求すら満たせない状況が生まれます。そうした子どもたちにとって、「将来、医者になりたい」などの「自己実現欲求」が生ずるには無理があるということです。

「生理的欲求」の上にあるのが「安全欲求」（第2層）です。子どもたちの誰もが、「嫌なことなどされず、安心・安全な気持ちで学級生活を送りたい」という欲求を持っています。その欲求に応えるのが「教育のプロ」である私たち教師の重要な仕事の1つです。その具体方策が「ルールづくり」となります。「ルールづくり」の大切さは、教師であれば誰もが体験的に理解していることでしょう。その体験を「欲求階層説」という理論によって支えたら、私たちは明日から、より強く自信を持って「ルールづくり」に向かっていけるのではないのでしょうか。

第3層は「所属・愛の欲求」です。「社会的欲求」ともいわれます。「この学級に所属したい」「先生や友だちに愛されたい（声をかけてほしい、気にかけてほしい、など）」という欲求です。続く第4層は「承認欲求」です。「私を認めてほしい」などの欲求です。この第3層・第4層の欲求に応える具体方策が「ふれあいづくり」になると考えます。ふれあいは「リレーション」といわれることがあります。リレーションとは、「プラスもマイナスも含めた感情交流ができる関係。ホンネが言える関係」（國分・國分、1984）のことです。ちょっとやそっとでは切れない「太いかかわりの糸」ととらえてもよいでしょう。私たち教師は学級ルールという「素地」の上にとっしりと腰を据え、教師と子どもとの間の「縦糸」、子ども同士の「横糸」を織り上げていく。そうすることで、やがては縦糸・横糸がびっし

りと織り上がった「学級という機」になる（理論4：機織り理論）。  
私は「ふれあいづくり」の完成形をそのようにとらえています。

学級が、「ルール」と「ふれあい」のある「居場所」であれば、「自己実現欲求」（第5層）は子どもたちのなかに自然に湧き上がってくることでしょう。「僕は将来、〇〇になることが夢なんだ」「その夢、いいね。きつとなれるよ」等々、子どもたちが互いの思いや夢を語り合う。そんな素敵な学級づくりは、まさに私たち教師の「自己実現欲求」ともいえるのではないのでしょうか。

